

エコツーリズムでの国産アロマの活用 ——飯能市におけるエコツアーの事例から——

平井 純子

1. はじめに

観光立国が推進されるようになって久しい。2006年12月の議員立法による観光立国推進基本法の成立や08年10月の観光庁の設置、そしてこれに伴う多くの取り組みがなされてきた。新たな観光旅行分野の開拓もその重要な施策のひとつであり、ニューツーリズムの創出・流通が促されている。ニューツーリズムの代表的なものとしては、環境省のエコツーリズム、農林水産省のグリーン・ツーリズム、経済産業省の産業観光などがあげられ、それぞれの専門性に合わせたツーリズム、観光を推進しており、その中で新たな観光ニーズの創出が期待されている。ニューツーリズムの中でも多様な地域で運用が可能となるのがエコツーリズムである。エコツーリズムの定義は様々だが、環境省によると¹⁾、自然環境や歴史文化を体験しながら学ぶとともに、その保全にも責任をもつ観光のありかた、としている。もともとは発展途上国の自然保護のための資金調達手段として導入された考え方だが、現在では日本を含めた先進国でも定着している観光の形態である。エコツーリズムの対象となるのは、世界自然遺産のような特異な自然観光資源を持つ地域だけでなく、もともと多くの観光客が訪れるマストツーリズムの対象地域、さらに里地里山里海といった生活に密着しているため、これまでは観光資源とは認識されてこなかったものを持つ地域である。さまざまな地域がそれぞれのエコツーリズムの取り組みを行っており、環境保全や観光振興、地域活性化が期待され、各地で一定の成果をあげつつある。

埼玉県飯能市におけるエコツーリズムへの取り組みは、2004年にエコツーリズムのモデル地区に指定されてから、2014年で11年目となる。2008年には環境省主催のエコツーリズム大賞の最高賞である大賞を受賞した。歴史や文化、自然環境を有効に活用する、里地里山を舞台としたエコツーリズムを推進しており、この概念に基づいたエコツアーを行っている。

本稿では飯能市エコツーリズムの一環として行われた、地元素材を使ったアロマ＝芳香、香りをアピールポイントにしたエコツアーを紹介する。エコツーリズムと

してのアロマの活用の一例を示し、今後のアロマを用いた観光振興・地域振興へとつなげていきたいと思う。

2. 飯能市とエコツーリズムの概要

飯能市は都心から50キロ圏内に位置し、里山の豊かな自然と歴史や生活文化にあふれる、人口約8万人の都市である(図1)。「森林文化都市」宣言をしており、市域の約75%が森林となっている。かつて、当該地域は西川材の主たる供給地となっていたが、日本の他の林業地と同様、森の荒廃が進んでいる。エコツーリズムへの取り組みの契機となったのは、年間250万人もの観光客が訪れるが、その大半が地域との関わりをもつことなく帰路につく中で、自然環境への悪影響だけがあること、また、中心市街地の活力低下や山間地域の過疎化、さらには森の荒廃など、いくつかの要因が複合的に絡み合っていたことにあった。

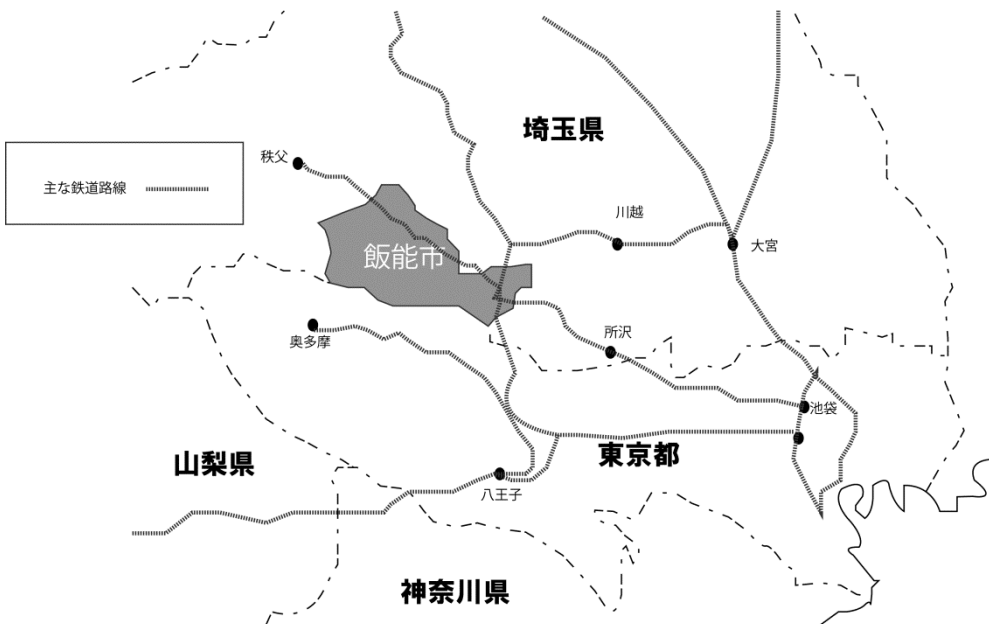


図1 飯能市の概要

現在、飯能市では産業環境部観光・エコツーリズム課にエコツーリズム担当職員が配置されており、担当課長以下3名のスタッフがおり、飯能市エコツーリズム推進協議会の事務局として機能している。飯能市エコツーリズム推進協議会では、2009

年に全国第一号となる「飯能市エコツーリズム推進全体構想」を定め、エコツーリズムを推進する地域やその目的設定、ルールづくりなどをし、これに基づきエコツアーを企画・運営している。エコツアーを実施するのは、NPO 団体や地域住民団体、個人、企業などと、オープンカレッジというガイド養成講習を修了した市民を中心とした活動市民の会である。2013年度は年間147のエコツアーを実施している。

飯能市のエコツアーのテーマ別の企画数をみると（図2）、「自然」型と「生活文化」型のエコツアーが多くみられる。アロマを対象とするエコツアーは「その他」に分類される。このカテゴリーにはほかに森林療法とローズガーデン&アユウヴェーダランチが含まれている。

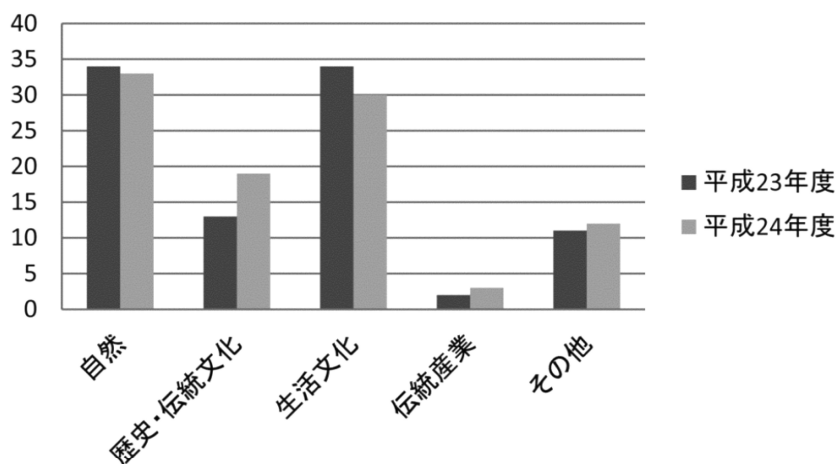


図2 テーマ別エコツアー企画数²⁾

3. アロマを用いたエコツアーの事例

3.1 駿大の里山 森の「香」と「食」癒しのエコツアー

2012年9月29日、筆者の勤務校である駿河台大学主催のエコツアー「駿大の里山 森の「香」と「食」癒しのエコツアー」を行った。目的は、ゲストとともに森を散策し、大学での森林に関する活動と里山の現状を学んでいただくとともに、間伐材を使って炭焼き、燻製作りをし、ヒノキ (*Chamaecyparis obtuse Sieb.& Zucc.*) の枝葉を用いてアロマウォーター作りをし、その「香」を楽しむことである。また昼食時には、森の中に設置された石焼き窯でゲスト自らがピザを作り、森の中での「食」を楽しんでいただいた。これらのプログラムを通じ「森の恵み」を体感して

いただきながら、森での「癒し」を感じていただく手助けをしていきたい、と行ったものである。

広報は飯能市エコツーリズムのチラシとホームページ、大学のホームページで行った。当日の参加者は32名で、男女比は3：4で女性が多く、年齢層では60代7名となり最も多かった。一方で、10歳以下の子連れで参加される30代の方も少なくなかった（図3）。

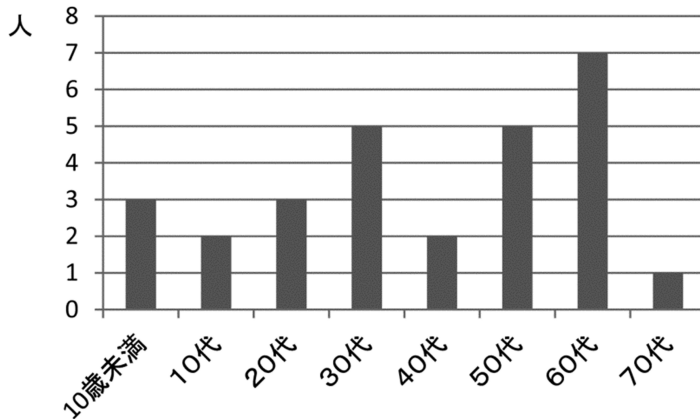


図3 年齢別参加者数
 (引用文献2) pp61により作成)

ツアーのタイムスケジュールの関係で、まずツアーの冒頭で水蒸気蒸留の器具を用いてゲスト一人ひとりにあらかじめ採取しておいたヒノキの枝葉を器具に入れていただいた。一通り入れたのち、水蒸気蒸留を開始し、沸騰し、最初の一滴が出てくるまでの間、ヒノキの精油、およびヒノキの蒸留水（以下ヒノキウォーター）の効能についてレクチャーを行った（写真1）。日常的にエッセンシャルオイル＝精油³⁾ 利用している方が数名いたものの、抽出の様子を見たことはなく、理科の実験道具のような装置に対し、ゲストは興味津々で、水蒸気が上がり最初の一滴が落ちた瞬間は大きな拍手が起こった。ヒノキウォーターが順調に抽出しているのを確認したのち、ゲストは学内の里山へ徒歩で移動し、ここでのプログラムに参加し、食事をとった。ゲストが里山で活動をしている間、水蒸気蒸留を続け、抽出したヒノキウォーターを帰りに参加者へのお土産として配布した。その際、使用期限や使用方法などについての詳細を説明し、別紙でお渡しした。ただし、小学生以下のゲストについては、安全面を重視し、ヒノキウォーターの代わりに、里山に生えたコナ

ラヤカエデなどの実生の苗を配布した。



写真1：ヒノキを水蒸気蒸留している様子

エコツアーを実施する際は、終了後にアンケートを行っている。このエコツアーについてのアンケート結果の中で、アロマに関わるコメントとしては、以下のようなものがあった。

- ・アロマウォーターづくりが初めての体験でよかった（70代男性）
- ・お土産など細かい気配り，また参加したいと思う内容でした（20代男性）
- ・能動的に参加者が何か体験できるようなものがあれば good（20代男性）

3.2 大人の自分磨きツアー —春の里山でアロマ体験—

2013年3月27日，筆者のゼミに所属する学生4名と筆者が企画したエコツアー「大人のじぶん磨きツアー～春の里山でアロマ体験～」を行った。ツアーの目的は仕事や日常生活でたまった疲れを飯能の自然の中で癒す，といったもので，高校生以上の女性限定とした。駿河台大学内にある里山で伐採したヒノキを使って抽出した精油を用いてハンドトリートメントをしたり，アロマソープづくりをしたりするプロ

グラムを設定した。これらの体験を通じ、自然の恵みやその大切さを知ってもらうとともに、地域の森が持つ機能について理解を深めていただこう、とした。

当日の参加者は9名で60代が6名であり（図4）、専業主婦が多かった。個別に聞き取りを行ったところによると、アロマに対する関心が高く、日常的に何らかの形でアロマあるいはこれに関連するものに接しているゲストがほとんどだった。

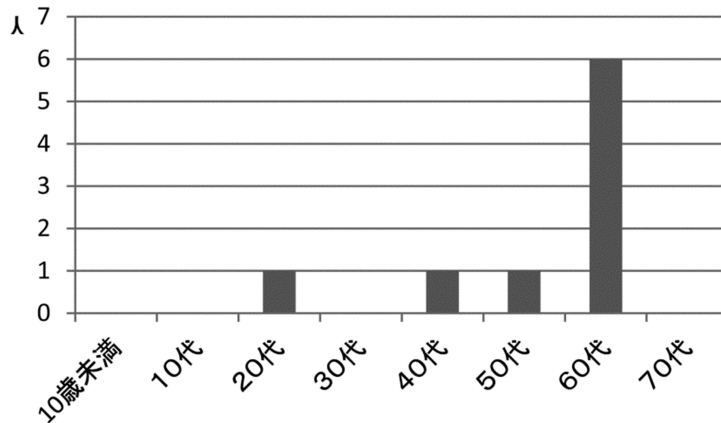


図4 年齢別参加者数

（引用文献2）pp96により作成）

まず教室でアロマソープづくりを行った。ヒノキとユズ (*Citrus junos*)⁴⁾の精油を用意し、2種類のソープを作成した。ソープの素材を捏ねて形を作る作業は粘土遊びのようで、ゲストはとても楽しんでいた（写真2）。各自作成したソープの出来について、一人ひとり紹介してもらった。ゲストは皆照れながらも自身の作品について語り、和やかな雰囲気であった。作成後、ソープを乾燥させる時間を使って、里山散策へ向かった。当初は散策途中の森の中でハンドトリートメントを行う予定であったが、小雨が降るあいにくの天候のため、予定を変更し、昼食後、室内で行うこととした。約1時間の里山散策ののち、昼食は地元の飲食店に、地元産にこだわった季節の食材をふんだんに使った料理を配達していただいた。



写真2：ユズをつかったオリジナルソープ

昼食の終了を見計らって、ハンドトリートメントのプログラムを行った(写真3)。ハンドトリートメントに用いた精油はヒノキで、精油を希釈するためのキャリアオイルはマカダミアナッツオイルを用いた。スタッフが直接トリートメントを施すことはできないため、トリートメントの方法を図示しながら、ゲスト同士で互いにハンドトリートメントをしていただいた。ハンドトリートメントでは飽き足らず、フットトリートメントをするゲストも現れるほど心地よいものであったようだ。



写真3：ハンドトリートメントをし合うゲストたち

エコツアー終了後のアンケート結果は以下のようなものであった。

- ・(女性限定だったので) 気を遣わずに楽しめた (50代)
- ・女性ならではの話題ができると思って (参加した)。期待通りなごやかなツアーでした (60代)
- ・石けん作りは初めてで楽しかった! (50代)
- ・楽しい内容でよかったです。アロマ系でしたらどの内容でも参加したいです (60代)

4. アロマを用いたエコツアーと今後の課題

上述のように、地元で採取した素材を用いたアロマを活用したエコツアーを実施した結果、以下のようなことが明らかになった。

まず、3.1のエコツアーについては、タイトルに「アロマ」やこれに類する文言を用いなかったため、ゲストのエコツアーへの参加動機が一律ではなかった。大学が主催するという性格上、社会貢献事業としての側面とともに、大学広報の一端を担うものでもあり、内容的に多様な要素を盛り込んだため、参加者は多かったものの、アロマに関心が高いゲストが多いとは言えなかった。水蒸気蒸留装置という普段目にするのがない器具とアロマウォーター抽出の様子を見せたことは、アロマに関

心があったゲストだけでなく、関心が薄かったゲストがアロマウォーターやアロマオイルが自然物から採れる有効なものだということを知ることとなった。エコツアーという観光空間において、水蒸気蒸留という非日常を体験したことで、身近な自然素材が有効活用できるという思いがけない「発見」、これはアロマへの関心を醸成することにつながった、といえよう。

一方、3.2のツアーについては、副題内にアロマと表記されていたため、これを主たる目的として参加されるゲストが大部分であった。エコツアーの内容についてはタイトルとともに広報しているものの、アロマという言葉が明記したほうがエコツアーとゲストの齟齬が小さくなる。事実、3.2のエコツアーのアンケート結果からは、高い評価が得られていた。しかし、それは一方でターゲットを絞ることとなる。実際、3.2は募集人数20名に対し、参加者は9名であった。既存のエコツアーの広報に載せる形であったため、新たなゲスト層の獲得には至らなかったと想定される。今一度、ニーズとターゲットを確認し、的確な企画ができるような工夫が必要と思われる。

現在の森林を取り巻く環境は深刻化している。今回エコツアーを実施した埼玉県飯能市のかつての主たる産業は林業であり、西川材の供給地として発展した。現在では林業やこれに関わる人材が減り、高齢化が進む。手を入れられなくなった森は放棄され、荒廃している。森があるのに活用されていないのである。

こうした現状の中で、アロマはさまざまな可能性を秘めている。しかし、現在流通するアロマの多くは海外からの輸入品である。国内にも有用なアロマの素材が多く存在することを認識してもらい、活用できるようになれば、森と人との物理的、心理的距離が今よりも近くなり、これに付随したかたちでの波及効果も見込めるのではないだろうか。今後も地元のアロマを活用したエコツアーを企画・運営し、観光振興・地域振興の一助となるよう、発信していきたいと思う。

1) 環境省ホームページ (www.env.go.jp) による。

2) 飯能市・飯能市エコツーリズム推進協議会：平成24年度飯能市エコツーリズム推進事業報告書， pp16， 飯能市（2013）

3) 精油とは、香りをもつ植物のさまざまな部分から抽出される芳香物質をいう。

4) ユズは圧搾法のため、本来ならば地元素材を用いたかったが用意ができなかった。使用したのは原産国日本・高知県の製品である。